

共同利用・共同研究課題「国境地域における日常的エスニシティ・宗教性：イラン・イラク・トルコのクルディスタンにおける比較事例研究」2024年度第2回研究会（通算第2回目）報告書

2024年10月11日（金）日本時間16時より、共同利用・共同研究課題「国境地域における日常的エスニシティ・宗教性：イラン・イラク・トルコのクルディスタンにおける比較事例研究」2024年度第2回研究会（通算第2回目）を開催した。研究会は、AA研セミナー室（301）とオンライン（Zoom）でのハイブリット形式で、使用言語は英語で開催した。

参加者は、共同研究者では、松永泰行（東京外国語大学）、飯塚正人、後藤絵美（以上、AA研）、Mostafa KHALILI（京都大学）、酒井啓子（千葉大学）、吉岡明子（日本エネルギー経済研究所）、貫井万里（文教学院大学）、Vakkas COLAK（東京外国語大学）、Sohrab AHMADIAN（東京外国語大学）、Mehmet Mashuq KURT（ロンドン大学）、Farhad BAYANI（イラン高等教育省社会文化研究所）、オブザーバーとして、Rawia Altaweel（千葉大学）、Giorgio Shani（ICU）、および Sofia HUERTA NUNES, Juliana BELINO, Shima WAKED, Mariam HESHAM（以上4名、東京外国語大学総合国際学研究科博士前後期課程）、が参加した。加えて、ゲストスピーカー（討論者）として、米国コロンビア大学の Andreas WIMMER が参加した。

報告者と報告タイトルは以下の通り。

- (1) Yasuyuki Matsuanaga and Sohrab Ahmadian, “The Transformation of Religiosity in Twentieth-Century Ouramanat: A Boundary Dynamics Approach”
- (2) Mostafa Khalili, “Contentious Boundary-work in Kurdistan: The Tri-Border Region of Iran, Iraq, and Turkey”

松永・Ahmadian 報告では、2023年11月のイラン西部諸州でのフィールド調査およびこれまでに収集したペルシア語・クルド語・アラビア語文献から得られたデータを、社会ネットワーク分析の手法を用いて分析し、中間発表的なものとして現時点で得られている成果を報告した。具体的には、1970年代にイラン側のオウラマーン地域で顕在化したイスラーム復興の潮流とそれ以前に支配的であったナクシュバンディー教団系マドラサ（ホジュレ）・ネットワークの繋がりについての分析が提示された。

Khalili 報告は、配布された “Ambivalent Ethnicity: How Individuals Navigate Categorical Complexity and Emotional Struggles in Everyday Life” と題された草稿に基づき、“Ambivalent Ethnicity” との概念が、フィールド調査から得られたデータの取りまとめに最も有効であるという議論が提示された。

ゲスト・スピーカーの Wimmer からは、社会ネットワーク分析の有効性と活用法および、Ambivalent Ethnicity 概念についてのコメント・批判および助言が提議された。続いて、活発な全体討議を行い、次回（11月2日）の研究会日程を確認し、解散した。

（報告：松永泰行）